

二年前の昭和三十六年六月二十七日は、わすれようとしてもわすれられない水害だった。

その日の午後、私たちは、部落ごとにならんで帰った。田沢川の水は真っ黒い水がゴーゴーとあふれ出て流れていた。雨は、ジャンジャンふるし、わたしはどうしようもなかった。しんりよう所のところの橋をわたって行った。

家につくとおかあさんやおばあさんが、家のものをはこびだしていた。わたしも、さっそく手つだった。

五時半ごろ、家があぶなくなって来たので、私とSはMちゃんの家へひなした。Mちゃんの家へ来ていても、家のことがしんばいで、おちついていれなかった。

少したつと親せきのおばあさんが、わたしたちをよびに来てくれたので、また親せきの家に行った。雨はゴーゴーとふっていた。わたしのズボンやふくは、中から中までびしょぬれだったけれど、おそろしきでなにも、かんじなかった。

親せきの家に来て、中にはいつてうろうろしていると、前のほうで、ドドドドと大きな音をたてて山がくずれて行った。わたしはすぐ外に出て行って見た。もう一けんの家は、こわされていた。

その所へおかあさんやおとうさんたちがずぶぬれになってとんで来た。おかあさんたちは、ひざまである水をおしのけてやって来たのだそうだ。

どこかのおじさんが、親せきの家の上の山もくずれかかっているといてくれた。私たちは、またにげた。

ねる時はKという家に行った。おむすびをくれたけれど、おそろしさのあまりのどにとうらなかつた。ふとんをしいてくれたけれど、みんなぼうつとしてすわっていた。

つぎの日の朝まだ雨がふっていたけれど、二十七日の日よりはだいぶりではなかつた。

わたしはもう家は流れたもの思っていた。下のほうへ見に行つて来た人が、私の家はまだのこっているにと、いつてくれた。おとうさんは、ほんきにしないで、見に行つたら、ほんとうにのこっていたそうだが、家の中はすなや土が、ゆかから上までつもっていたという。でも、私はのこつていてよかつたなど、ほつとした。

わたしたちは、さっそくつぎの日から土だしをはじめた。

田沢川でなくなつた人は九人も出たそうだ。こんなにもおそろしかつた水害だつたのだ。

私たちは、こんなおそろしい水害が二度とまたこないようにといのつているのだ。

(三十八年)